

公益財団法人明日佳 パラスポーツ研究成果報告書 2023 (No.7)

Journal of Parasports Research Vol.7



スポーツ基本法(平成 23 年法律第 78 号)(前文)

スポーツは、世界共通の人類の文化である。

スポーツは、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵(かん)養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動であり、今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものとなっている。スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない。

巻 頭 言

令和5年5月8日から、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが「2類相当」から「5類」に移行されました。この移行に伴って、各学校において、対面しての各種スポーツが徐々に活発な活動が為されてきたようです。



さて、当財団は、本道の特別支援学校や特別支援学級で学ぶ児童生徒のスポーツ活動を応援するため、当財団発足時から各特別支援学校等にスポーツ器具を寄贈したり、道内特別支援学校を招待するフットサル大会を開催するなどの事業と共に、スポーツ活動の実践研究を行っている教師等の皆様方を支援するための研究助成事業も積極的に行ってまいりました。

本研究報告書は、令和5年度に研究助成した教師の皆様方により、目の前の児童生徒の障がいの状況を把握したうえで、児童生徒に成就感を味わわせたいとの願いで、工夫考察した実践の内容です。是非とも、障がいのある児童生徒の指導を行っている多くの教師の皆様方に、本実践成果報告書の内容を吟味の上、ご参考にして頂ければ幸いです。

2024 年令和 6 年 3 月

公益財団法人 明日佳 理事長 小野寺 眞 悟

目 次

巻 頭 言

公益財団法人明日佳
理事長 小野寺 眞 悟

論 考 1

地域で生かされる特別支援学校の専門性 1
～子ども達のウェルビーイングに資するために～

北海道教育庁学校教育局特別支援教育課主査 沓澤整治

論 考 2

全国特別支援学校に夢を広げよう!! 4
～全国特別支援学校フットサル大会は生徒の夢を全国に広げます～

公益財団法人明日佳 事務局長 鈴木重男

実践研究 1

アダプテッドスポーツにおける授業改善と教材教具の工夫について 7
～主体的な手の動きによる投運動の充実をめざして～

北海道真駒内養護学校 教諭 弘 松 百 合

実践研究 2

スポーツを通じて技能向上と人間力の向上の関係性について 14
～運動未経験者を対象として行う研究～

北海道今金高等養護学校 教諭 中 川 千 波
教諭 殿 山 祥 子

実践研究 3

病弱児童生徒のスポーツ活動の取り組みについて 20
～ボッチャ(オンラインボッチャ)を通した主体性の向上～

北海道手稲養護学校三角山分校 教諭 梅 野 綾 人

実践研究 4

ICT及び視覚支援を用いた部活動指導の工夫と実践 26
～バスケットボール部の指導実践～

北海道紋別高等養護学校 教諭 岸 下 綾 乃

地域で生かされる特別支援学校の専門性 ～子ども達のウェルビーイングに資するために～

北海道教育庁学校教育局特別支援教育課主査 沓澤 整治

I はじめに

北海道教育委員会では、障がいのある子どもの教育を行うため66校の道立特別支援学校を設置しており、国立1校、市立5校、私立1校を合わせると、道内の特別支援学校は、73校（令和5年5月1日現在）となります。

これらの特別支援学校で行われる教育の特色は、少人数の学級で一人一人の障がいの状態や発達の段階・特性等に応じてよりよい環境を整え、その可能性を最大限に伸ばせるよう、教育的ニーズに応じた専門性の高い教育を推進していることです。

II 特別支援学校における体育の授業

障がいのある子どもの多くは、学校生活の中で、主に体育の授業を通して、様々なスポーツを経験します。特別支援学校では、子どもの実態に応じて、陸上運動や水泳運動（プール学習）、ボール運動（サッカー等）などが行われています。

平成29年4月に公示された学習指導要領の体育科における改訂のポイントは、次の4点です。

- 心と体を一体として捉え、生涯にわたる心身の健康の保持増進と豊かなスポーツライフの実現を重視
- （小学校）運動を苦手と感じている児童や運動に意欲的に取り組まない児童、障害のある児童等への指導について配慮
 - （中学校）体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等に関わらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方が共有できるよう内容を改善
 - （高等学校）体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等に関わらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を社会で実践できるよう内容を改善
- 体験的な活動を重視し、「する、みる、支える、知る」のスポーツとの多様な関わり方やオリンピック・パラリンピックに関する指導を通して、スポーツの意義や価値等に触れることができるよう内容を改善

このように、体力や技能の程度、年齢や性別及び障がいの有無等にかかわらず、運動やスポーツの楽しみ方を共有できるよう配慮すること、運動やスポーツが楽しいと感じる授業づくりを目指す

ことが求められていますが、特別支援学校においても、従来からこれらを大切にし、授業が行われてきたと感じています。

障がいのある子どもの場合、一般に行われているスポーツの競技をそのまま適用しても、自分の力を十分に発揮できない可能性もあることから、特別支援学校の先生方は、子どもが、体育の授業等を通して、スポーツに関心をもち、スポーツに取り組むことが好きになるよう様々な工夫をしてきました。上林（2020）は、特別支援学校の体育の授業等で行われている障がいの特性等に応じたスポーツの工夫を表1のように整理しています。

表1 道立特別支援学校の体育の授業等における障がいの特性等に応じたスポーツの例

障がい種別	主なスポーツの競技等
視覚障がい	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールボール（パラリンピック競技） ・サウンドテーブルテニス（音の出るボール等を使用し、ネットの下にボールを転がして行う） ・クライミング（体育館に設置したクライミングウォールを登る競技）
肢体不自由	<ul style="list-style-type: none"> ・ボッチャ（パラリンピック競技） ・ゴロ野球（各自に合わせてボールの持ち方を変えるなど、個別にルールを適用して行う）
病弱	<ul style="list-style-type: none"> ・スティックスポーツ（電動車いすを操作しながら、各自に合わせたスティックを使用して床上のボール等を動かし、サッカーなどの競技を行う）

※ 聴覚障がい特別支援学校では、視覚情報によるルール等の説明や競技中のコミュニケーションへの配慮、知的障がい特別支援学校では実態に応じたルールや道具等の工夫などを実施

III ウェルビーイングの実現

令和5年6月に、国が策定した新たな教育振興基本計画のコンセプトとして「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が示されました。

「ウェルビーイング」とは、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものであり、個人のみ

ならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念です。また、その実現とは、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなることであり、教育を通じて日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図っていくことが求められています。

スポーツという点では、「健やかな体の育成、スポーツを通じた豊かな心身の育成」として、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質・能力を育成するとともに、生活習慣の確立や学校保健の推進等により、心身の健康の増進と体力の向上を図ることを目標の一つとしており、基本施策として「スポーツを通じた共生社会の実現・障害者スポーツの振興」を次のとおり示しています。

- ・東京2020パラリンピック競技大会のレガシーとしても、性別や年齢、障害の有無等にかかわらず、「する」「みる」「ささえる」スポーツの価値を享受できるよう、様々な立場・状況の人と「ともに」スポーツを楽しみ、誰もがスポーツにアクセスし続けられる環境を整備し、スポーツを通じた共生社会の実現・障害者スポーツの振興を図る。

教育振興基本計画（文部科学省 令和5年6月）より

IV 北海道と北海道教育委員会の取組

1 「心のバリアフリー」事業

このように社会の価値観が大きく変化する中、北海道教育委員会では、平成27・28年度に文部科学省委託事業「インクルーシブ教育システム構築モデル事業（学校における交流及び共同学習を通じた障がい者理解（心のバリアフリー）の推進）」を実施しました。

本事業では、障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒が共に障がい者スポーツを行うことや、障がい者トップアスリートの体験談を聞くことなど、障がい者スポーツを通じた交流及び共同学習を行いました。

小・中学校、高等学校の児童生徒には障がいに対する理解啓発を行うこと、特別支援学校の児童生徒には社会参加への意欲を高めることを目的に、ブラインドサッカーや、車いすカーリング等に取り組みました。

本事業で実施したアンケートでは、障がい者スポーツに取り組む前に、「難しそう」や「不安」と回答した児童生徒が41%、「楽しそう」と回答した

児童生徒は40%でした。

交流実施後のアンケートでは、「難しかった」や「不安だった」と回答した児童生徒が31%に減少し、「楽しかった」と回答した児童生徒は、58%に増加しました。（※写真：リーフレット「障がい者スポーツを通じた相互理解」北海道教育委員会（平成28年3月より）



写真1 ブラインドサッカーを通じた交流及び共同学習

表2 参加した児童生徒の感想①

- 中学生の感想「目が見えない人に、ボールの位置を伝えるには、3歩前など、具体的に伝えることが大切と感じた」
- 特別支援学校生徒の感想「ブラインドサッカーは練習すると上手になり、楽しくなる競技だと感じた」



写真2 車いすカーリングを通じた交流及び共同学習

表3 参加した児童生徒の感想②

- 小学生の感想「障がいのある人と初めて一緒に障がい者スポーツを行ったけど、上手に取り組んでいた」
- 高校生の感想「人それぞれに障がいの程度が違うことを理解し、必要な手助けをしながらも一緒に楽しむことが大切であることが分かった」

2 特別支援学校パラスポ体験会&セミナー

令和5年2月に、北海道環境生活部と北海道教育委員会の主催で、「令和4年度北海道パラアスリート発掘プロジェクト『特別支援学校パラスポ体験会&セミナー』（会場：札幌視覚支援学校）」を実施しました。

本事業は、障がいがある児童生徒が、様々な運動を体験できる場を提供することにより、継続した日常のスポーツを行うための知識や技術を身に付けるとともに、アスリートを目指すきっかけをつくり、地域のスポーツ団体・チームへの参加を促すことが目的です。

当日は、札幌市内の特別支援学校の児童生徒や地域住民、ボランティアを含む約40名が参加し、午前の部では、ボッチャ、フライングディスク、競技用車いす、フットサルの競技を体験し、午後の部では、北海道出身のパラアスリートによる対談を聞いた後、パラリンピック競技であるゴールボールの体験をしました。



写真3 「特別支援学校パラスポ体験会&セミナー」の参加者

私は、午前の部の競技体験で、フットサルの運営・進行を担当し、参加した子ども達と実際にかかわることができました。

フットサル（サッカー）の最大の喜びは、シュートしてゴール（得点）を決めることであると考え、「PKゲーム」を内容として設定しました。

また、当日は、車いすを使用する子どもが参加していたことから、次のような工夫をしました。

- ・子どもの実態に応じてゴールからボールまでの距離を変更・調整
- ・様々な大きさと材質のボールを用意

参加した子ども達は、何度かシュートを繰り返していると、「より強いボールを蹴るにはどのようにしたらよいか」、「ねらった位置にボールを蹴る

にはどのようにしたらよいか」など、自ら考え、助走を長く取ったり、車いすを回転させてシュートしたりするなどの工夫をするようになりました。

自ら考えた作戦や方法でゴール（得点）を決めて、保護者や運営スタッフとハイタッチをして喜ぶ子どもの姿は、スポーツそのものがもつ魅力を十分に感じさせるものでした。



写真4 フットサル体験でシュートする参加者

V 終わりに

各取組で、参加した子ども達が達成感・充実感を味わっているのは、「Ⅱ 特別支援学校における体育の授業」でも説明した、特別支援学校がこれまで培ってきた各障がいにおける指導・支援の専門性に基づくプログラムを用いたことも大きな要因であると考えています。

特別支援学校において、従来から行われてきた指導・支援の方法や内容などは、小・中学校や高等学校、地域の方々にとっても、これまで行ってきた取組に加え、新たな専門性に触れる貴重な機会になると考えます。障がいのある子ども達が学校卒業後に地域で豊かな生活を過ごしていくためにも、特別支援学校の取組を地域に発信することが、今後、より一層大切になると考えます。

先生方がいかに専門性を発揮し、共生社会の実現と子ども達のウェルビーイングに資するよう、北海道教育委員会として、今後も特別支援学校を支えてまいりたいと考えています。

引用、参考文献等

- 1) 上林宏文 (2020) 「スポーツを通じた自立と社会参加の充実に向けて」 特別支援教育ほっかいどう第25号 (2020年3月) 北海道立特別支援教育センター

全国特別支援学校に夢を広げよう!!

～全国特別支援学校フットサル大会は生徒の夢を全国に広げます～

公益財団法人明日佳 事務局長 鈴木重男

I 障害種別に関係のない全国特別支援学校生徒のスポーツ競技会の創設

特別支援学校制度は、障がいの種類(視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由、病虚弱、新たに発達障がいも加えられ)に関係なく、一つの学校に複数の障害種別の学校部門の設置も可能になりました。

さて、中学生と高校生には全国的な学校のスポーツ組織として、全国中学体育連盟と全国高等学校体育連盟があり、スポーツ庁をはじめとして各自治体やスポーツ団体が後援して、多様なスポーツ種目で広域のスポーツ活動が活発に行われており、全国的視野でのスポーツ活動が生徒の心も体も鍛え上げ、将来の我が国をけん引する力の一つにもなっています。

しかし、特別支援学校には全国規模の広域のスポーツ大会は、公益財団法人日本ライオンズが主催する全国特別支援学校フットサル大会が開始されるまでは、障害種別ごとの「全国盲学校フロアバレーボール大会」や「全国知的障害特別支援学校高等部サッカー選手権」「もうひとつの高校選手権」、肢体不自由特別支援学校の「ボッチャ甲子園」があるだけです。

公益財団法人日本ライオンズは、令和3年2021年、障害種別に関係なく特別支援学校で学ぶ生徒の心身の健全な発達を促すとともに、特に自己責任、克己心やフェアプレイの精神を培いつつ、仲間や指導者との交流を通じて、生徒間のコミュニケーション能力を育成し、豊かな心と他人に対する思いやりを育むものとして、全国規模のスポーツ競技会として、全国特別支援学校フットサル大会を創設しました。

II 何故、フットサルの競技会か？

公益財団法人日本ライオンズは、全国規模のスポーツ競技会の種目選定に当たり、男女差や中学部・高等部生徒の発達段階に関係なく、かつ狭い空間でも大きな活動量を得ることができるフット

サルに着目しました。

とりわけ、現在、本州では、春から秋にかけての猛烈な暑熱により、特別支援学校では外グラウンドでのスポーツ活動が困難なことが多いことから、全国の特別支援学校に設備されている冷房の効いた体育館や狭い屋内での少人数のスポーツとして、フットサルが望ましいとの結論に至りました。

また、フットサルは、ボール一つで、狭い空間でも活発な運動を仲間と共に楽しむことができます。特に、空中を飛ぶボールに恐怖感を感じる障がいのある子どもたちが多いことから、軟らかいボールなどを工夫することにより、ボールがぶつかっても怖がることなくゲーム参加できる種目です。

さらに、フットサルは、3～5人制で、正式ゲームが可能ですので、小規模な特別支援学校でも参加することができる利点があります。このようなことから、公益財団法人日本ライオンズは、フットサル競技での全国大会を創設しました。



写真1 全国大会で活躍する女子選手(2番名古屋聾学校)

III 特別支援学校としての大会理念

公益財団法人日本ライオンズは、大会を開催するにあたり『自立と RESPECT』を理念に掲げて、生徒の卒業後の就労に際しての資質能力の向上に資するように努めています。

1 自立への願い

特別支援学校では、多くの生徒が高等部を卒業した後、実社会に出て就労しています。このことから、生徒が自ら判断し、自立的行動が可能になるようにと願い、生徒の自立的行動、主体的判断を尊重する大会を目指し、通常のフットサル競技会では許されている監督・コーチのベンチでの指示・命令を一切禁止することとしています。

したがって、監督・コーチは、選手交代時以外はベンチに座り、生徒の対戦状況を見守り、生徒の自立的・主体的活動を正確に把握して、ハーフタイム時などでは、穏やかな態度・口調で、生徒の主体的な判断・決定・実行する力を高めるような温かな思いやりのある言葉遣いや働きかけを行うことを重要としています。

2 RESPECT への願い

生徒の多くは、高等部卒業後、実社会に出て就労し、その折、多様な人間関係が予想されます。この場合、他人を思いやる RESPECT(他人を思いやり)の心があれば、大抵のことは円滑に進めることができます。

したがって、この大会を通して、自校や他校の生徒同士、学校の先生、大会関係者、特にゲームでは審判への RESPECT を示す大会を目指しています。

このため、宿泊する宿舎や競技場での行動を通して、自校の生徒同士、引率の先生、対戦相手校の生徒、審判、大会関係者などには RESPECT を表す「こんにちは。」や「お願いします。」「ありがとうございます。」などの具体的な言葉や行動を行うことを重要としています。

IV 全国特別支援学校フットサル大会の経過

1 令和3年2021年度、全国特別支援学校フットサル大会創設記念大会の開催

公益財団法人日本ライオンズは、コロナ感染症が蔓延していた、令和3年2022年11月、全国特別支援学校フットサル大会創設記念全国大会を札幌市で開催として計画しました。

しかし、コロナウィルス感染症がより全国的に拡大したことから、全国9地区の各地区大会の開催を中止して、参加希望校の抽選で各9地区の全国大会出場校を開催する方向で進めましたが、コロナウィルス感染症のより重篤な罹患例が全国的

に続発したことから、国の指導を踏まえて、止む無く札幌での創設記念大会を中止しました。この結果、全国特別支援学校フットサル大会創設記念全国大会は、幻の記念大会となりました。

この大会の北海道代表は、抽選により、北海道函館高等支援学校が参加することとして、綿密な練習計画を立てて、準備していました。

2 令和4年2022年度、第1回全国特別支援学校フットサル大会札幌大会

第1回全国特別支援学校フットサル大会各地区大会には、全国で70校の特別支援学校が出場しました。

北海道地区大会には、帯広養護学校、高等聾学校、小樽高等支援学校、市立札幌みなみの杜高等支援学校、千歳高等支援学校、札幌あいの里高等支援学校、市立札幌豊明高等支援学校、白樺高等養護学校、新篠津高等養護学校、札幌高等養護学校、中札内高等養護学校、今金高等養護学校、伊達高等養護学校、函館高等支援学校、紋別高等養護学校が出場し、中札内高等養護学校が優勝しました。



写真2 第2回北海道地区代表校 中札内高等養護学校

第1回の全国大会は、関東地区から2校が出場し、各地区大会を勝ち抜いた全10校で全国の覇権が競われました。成績は、優勝が大阪府立なにわ高等支援学校、準優勝が島根県立松江養護学校乃木校舎、第3位が鹿児島県立鹿児島高等特別支援学校、第4位が北海道中札内高等支援学校、第5位が愛知県立名古屋聾学校、第6位が千葉県立特別支援学校流山高等学園、第7位が東京都立羽村特別支援学校、第8位が香川県立香川東部養護学校、第9位が石川県立いしかわ特別支援学校、第10位 秋田県立ゆり支援学校でした。

3 令和5年2023年度、第2回全国特別支援学校フットサル大会福岡大会

第2回全国特別支援学校フットサル大会各地区大会には、全国で111校の特別支援学校が出場し、全国9地区で各地区代表の決定戦が開催されました。

北海道地区大会には、星置養護学校ほしみ学園、高等聾学校、釧路鶴野支援学校、小平高等養護学校、伊達高等養護学校、紋別高等養護学校、今金高等養護学校、函館高等支援学校、中札内高等養護学校、白樺高等養護学校、札幌あいの里高等支援学校、小樽高等支援学校、新篠津高等養護学校、札幌高等養護学校、市立札幌みなみの杜高等支援学校、千歳高等支援学校、市立札幌豊明高等支援学校、臺灣台北市立啓聡学校、臺灣台南大学付属台南啓聡学校が出場し、市立札幌みなみの杜高等支援学校が優勝して、全国大会に出場しました。

全国大会は、関東地区から2校が出場し、各地区大会を勝ち抜いた全10校に、地元枠で福岡県代表と台風で九州地区大会に出場できなかった沖縄県代表の全12校が出場しました。



写真3 第2回全国大会優勝校への表彰

成績は、優勝が栃木県立宇都宮青葉高等学園、準優勝が奈良県立高等養護学校、第3位が日野中央高等特別支援学校、第4位が愛知県立名古屋聾学校、第5位が島根県立松江養護学校乃木校舎、第6位が大分県立さくらの杜高等支援学校、第7位が福岡県立特別支援学校「福岡高等学園」、第8位が富山県立富山高等支援学校、第9位が沖縄県立中部農林高等支援学校、第10位が札幌市立みなみの杜高等支援学校、第11位が宮城県立小松島支援学校、第12位が香川県立香川東部養護学校でした。

V 北海道地区大会と全国大会の今後の開催

1 北海道地区大会の今後

北海道地区大会(小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会)は、道立野幌総合運動公園や江別市教育委員会のご協力を頂き、今後は、毎年、7月の最終土曜日に開催します。

令和6年2024年度北海道地区大会は、7月27日(土)、道立野幌総合運動公園総合体育館で開催します。

2 全国大会の今後

全国大会は、第3回名古屋大会は令和6年2024年11月1日(金)開会式で11月2日(土)競技会、表彰式、閉会式、会場は名古屋市中村スポーツセンターで開催されます。

第4回東京大会は令和7年2025年10月31日(金)開会式で11月1日(土)競技会、表彰式、閉会式、会場は東洋大学赤羽台キャンパス体育館で開催されます。第5回大阪大会は令和8年2026年令和8年11月6日(金)開会式、11月7日(土)競技会、表彰式、閉会式、会場は堺市大浜体育館で開催されます。



写真4 第2回全国大会12参加校の整列

アダプテッドスポーツにおける授業改善と教材教具の工夫について ～主体的な手の動きによる投運動の充実をめざして～

北海道真駒内養護学校 教諭 弘 松 百 合

I はじめに

1) アダプテッドスポーツとモルックについて

アダプテッドスポーツとは、体育やスポーツに参加する個々の実態（障害の有無、年齢、性別、発達段階、身体状況、運動技能等）に応じてスポーツの用具、ルール、技能、施設や体育教材、指導方法を工夫、修正、変更したり開発したりする考え方のことである。また、スポーツを修正・変更する際には最小限の修正・変更にとどめることが定義されている。アダプテッドスポーツとして、スポーツの環境を変え、スポーツにアクセスできるようにすることは、ICF（国際障害者分類）の概念枠組みの中で、「環境因子が充実することで活動の参加や制限がなくなることにもつながる」と考えられている。

モルックはフィンランドにて開発されたアダプテッドスポーツの一つであり、投げる木（モルック）を活用して、12本の木の棒（スキットル）を倒し、50点を目指して競う、勝敗の有無がわかりやすいニュースポーツである。

2) 研究の背景と目的

本研究は、肢体不自由教育におけるアダプテッドスポーツの考えを基に、ニュースポーツであるモルックを取り上げ、試行錯誤をしながら、2か年計画として高等部の生徒を対象に進めてきた。1年目は、自立活動中心、知的代替小I・II段階に相応する教育課程の高等部2学年の生徒14名を、2年目は、知的代替小I段階に相応する教育課程の高等部1・2・3学年の生徒11名を対象にして、授業改善を行った。

1年目は、モルック競技について参加の可能性を探り、様々なスポーツの参加充実に向けて、誰もがモルックに参加してスポーツのアクセスできるよう工夫・改善を図った。

2年目は、一人ひとりに焦点を当て、個別最適

な指導工夫・改善を行った。

II 対象生徒について

1) 学校の状況について

真駒内養護学校は札幌市南区に所在する開校62年目を迎えた肢体不自由特別支援学校であり、小学部、中学部、高等部を設置している。準ずる教育課程から自立活動を主とする教育課程までを編成しており、加えて医療的ケアを必要とする児童生徒も多く在籍しているなど児童生徒の実態は多様である。

また、小学部では運動会、中学部では記録会、高等部では体育大会など特別活動においても様々なスポーツに取り組んでいる。特に、ボウリング、ポッチャ、カーリングでは、教材教具を用いて、具体物を放す、押す、引っ張るという動きが身につけている児童生徒が少なくないのが特徴である。

2) 対象生徒の実態について

生徒	保健体育科における実態
A 自活主	・前腕部を屈曲・伸展することができる（ことがある）。
B 知的小I 段階相応	・視覚障がい聴覚優位である。 ・教師の言葉がけや合図に応じて、行動することができる。
C 知的小I 段階相応	・車いすで自走することができる。 ・取組が消極的になりがちで、下を向いてしまうことが多い。
D 知的小I 段階相応	・テニスボールを投げるすることができる。 ・目線上の高い目標物に向けて投げることができる。
E 知的小I 段階相応	・独歩 ・手を使ってボールを放したり、押したり、転がしたりすることができる。 ・合図に応じて、行動することができる

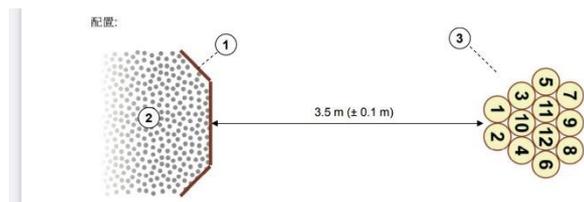
Ⅲ モルックのルールと変更に関して

1 正式ルール〈IM0 国際モルック連盟参照〉

スキttl: 1~12 までの数字が記載されている木製のスキttl (12 本)、高さ 15cm、直径 5.9cm であり、45° に面取りされているモルック: 投げる棒をモルックと呼ぶ。

モルックカー図①参照: 96cm

配置: スキttl はモルックカーから 3.5m (± 1m) に配置する



内容

- ① 2 チームで対戦する。順番にモルックを投げてスキttl を倒す。
 - ② 倒した本数により点数が決まり、複数倒れた本数が点数になり、一本の場合は書かれた数字が点数となる。
 - ③ スキttl は倒された地点で再び立てる。完全にスキttl が倒れないと点数はカウントされない。50 点を超えた場合は 25 点に戻る 3 回連続ミスすると 0 点になり失格となる
- ②③を繰り返し、先に 50 点丁度になるまで得点した方が勝ちとなる。

2 簡易ゲーム

好きなスキttl やモルック活用して、一人 2 投の個人戦を行った。

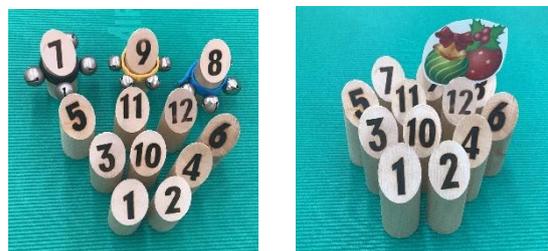
スキttl は見えやすいように、重ならないよう間隔を開けて置く。

自分で選んだ 1 本のスキttl を 5 点とし、それ以外はスキttl の倒れたその本数が点数となるルールに変更した。



① 移行ルール

簡易ゲームからゲームへの移行で、用具類を少しずつ、本来の用具に変えていき生徒が取り組めるようにした。



スキttl に鈴やステッカーを貼り、用具を「楽しい」「わかりやすい」「やりやすい」ものにアレンジして、やる気を出すための環境作りを行った。ゲームの内容として 2 チームで 15 分間の時間制で点数の高い方の勝ちという内容でチーム戦を行った。

② 最終ルール

正式ルールに近い内容で行った。モルックカーは使わず自分の投げたい距離で行い、2 チームで行った。モルックやスキttl はアレンジした物を活用した。



Ⅳ 研究の概要

- 1 題材: 「陸上(投): モルック」
- 2 日時: 令和 4 年 8 月 ~ 9 月 4 コマ...①
令和 5 年 8 月 ~ 9 月 5 コマ...②
- 3 場所: 真駒内養護学校
体育館・玄関ホール・作業室
- 4 対象生徒:
 - ① 高等部 2 学年 14 名
(自活主、知的代替小 I・II 段階)
 - ② 高等部 1 ~ 3 学年 11 名
(知的代替小 I 段階)

5 ねらい

○自ら主体的にモルックを投げ、ゲームを楽しむことができる

(1) 生徒が自ら活動できるような教材教具を工夫することで、生徒の「やってみよう」という意欲を引き出したり、楽しくモルックに参加したりすることができる。

(2) 重度の肢体不自由及び知的障害の重複障害を有する生徒に応じた、モルックの投げ方などの指導方法を工夫することによって、より質の高い活動参加が可能になる。

投球ができるようになるために

- ・「当ててみたくなる的」「見やすい的」を工夫して制作しねらいを定めて練習し、投げることの楽しさを見いだすようにする。
- ・的が倒れるときに、おもしろい音、心地よい鈴などを用いる。

やる気を出すための環境づくりや支援方法

- ・用具を「楽しい」「わかりやすい」「やりやすい」ものにアレンジしてやってみる。

6 内容

時数	主な指導内容
1	オリエンテーション →モルックの基本的なルールや単元の学習内容を知る →様々な投球方法で触れてみる
2	投球練習① →自分に合った投球方法を見つける 簡易ゲーム
3	投球練習② →自分に合った投球方法を見つける 簡易ゲーム
4	投球練習③ →自分に合った投球方法で反復練習 簡易ゲーム ゲーム (移行ルール)
5	投球練習④ →自分に合った投球方法で反復練習 作戦会議 ゲーム (最終ルール)

7 個別目標

生徒	目標
A	補助具を使用して、教師と一緒に方向を決めゲームを楽しむことができる。
B	ゲームを楽しみ、「ポイ」の支援者の言葉から、自分でモルックを持ち、力強く投げるができる。
C	興味を喚起させゲームを楽しみ、目標物をねらって投げるができる。
D	目標物をねらい、遠近左右に投球することができる
E	合図を受けて立位の姿勢からモクッルを投げスキットルに当てることができる

V 事例

1 事例生徒Aについて

(1) 実態と仮説

・筋力や前腕部の動きで、モルックをつかむ、投げるのが難しい。

→小さな動き、力でモルックを投げることができるよう教材教具を工夫し、参加することができるのではないかと

→モルック競技の特性が伝わるような教材教具の工夫をすることでモルックを楽しむことができるのではないかと

(2) 方法～**スポーツ用具の工夫**

・モルック投球器を作製し、ひもを引っ張ることにより簡単にモルックを投げることができるようにした。



〈真駒内養護学校 朝見作〉



道具：塩ビパイプ7本 滑り止めマット
 結束バンド ピンセット
 たこ糸 籠（重り 体育台）

塩ビパイプを結束バンドで止め、下部と上部をたこ糸で止めた上部の塩ビパイプのピンセットを抜くことにより、てこの原理を利用して、籠上に乗ったモルックが飛ぶ仕掛けとなっている。安全面を考え、滑り止めシートや重りを用いるとともに、生徒が目の高さで操作できるよう体育用台を活用した。

また、引く力をより引き出すために持ち手には柔らかいリングを使用した。いつも作業等で使用している同様の仕掛けの補助具のためスムーズに取り組むことができた。



(3) 経過と成果

生徒Aは視線や瞬き、手の動きでタイミングや合図をして、教師とやりとりしながら進めていった。初めは塩ビパイプに入っているピンセットをどの程度引きだし、軽い力で引くことができるか教師と一緒に試してみた。いつも作業等で活用しているものと同様の仕掛けのため、ひも先のリングを持ってスムーズに腕を引き込み、モルックを飛ばすことができた。

また、引いたモルックがどの程度飛んだか目の前で何度も見て、モルックとスキットルが当たる音を確認しながら行った。繰り返し行うことで道具やモルック競技にも慣れ、2チームのゲームでは、モルックやスキットルを見て、教師と左右のねらいを、視線や瞬きで伝えることができた。

2 事例生徒Bについて

(1) 実態と仮説1

・モルックの棒は重く、自分でつかみどのタイミングで投げたらよいかわからないのではないかと。→軽いモルックや素材等工夫し自分でつかめる物を製作し、投げるタイミングなど、言葉かけや反復練習で向上させることができるのではないかと。

(2) 方法1～**体育教材の開発**

・本物の形に近い軽いモルックと同じくらい重いモルックを用意して、一人一台モルックを使用できるようにした。

○補助モルック



① ② 正規

	①	②	正規
重さ	60～100 g	370g	250 g
縦	16cm	16cm	22.5cm
太さ〈円〉	直径 6cm	直径 6cm	直径 5.9cm

補助モルックは紙で作っており、ロール模造紙の芯を活用。

(3) 経過と成果

生徒Bは初め正規のモルックに挑戦したが、投げたくてもつかむ、握る、投げる動作は困難であった。軽いモルックを使用することで、つかむ練習から始め、つかんで握れるようになった。2、3回目から教師の「ほい」の合図で、力を入れて握って投げる一連の動作ができるようになり繰り返し行った。一人一台モルックやスキットル用意し、反復練習も可能になり、取り組みがスムーズになった。投げ方が分かった時点で、重たいモルックを投げることに練習を切り替えた。重たいモルックを投げることに慣れたことで、本番では軽いモルックを投げ、飛距離を倍に伸ばすことができ、活動も活発になっていった。

(1) 実態と仮説2

聴覚優位のため目標物がわからず、モルックを投げた場合どのようなようになるかの因果関係がつかめていないのではないか。

→音の鳴るスキットルを用意し、音の鳴る場所を確認し、投げて音が鳴るような因果関係をつかむことで学習を進めるのがよいのではないか。

(2) 方法2～**体育教材の工夫**

当たると音が鳴る補助スキットル活用した。

○補助スキットルⅠ



音が鳴るスキットルを活用してわかりやすさを重視した。

(3) 経過と成果

生徒Bは、音が鳴る補助スキットル活用し、音で当たったことがわかり、取組がスムーズになった。初めはどのスキットルが倒れると、心地よい音なのか、おもしろい音なのか、当ててみたくなる音なのかを選び、鈴を選んだ。生徒Bは、モルックがスキットルに当たったかどうかについて鈴の音でわかり、投げる方向がわかり、授業に取り組む意識も変わり意欲につながった。

一方で、スキットルの場所が分かったが、投げ方が体の中心から外側に腕を動かすため、投げる方向にばらつきが見られる課題が残り、今後投球方法を改善していく必要がある。

投球練習では1, 2回目に音のなるスキットルを選び、支援者の「ポイ」の合図で投球練習を反復する。投げて音が鳴ることにより、スキットルに当たったとわかった。3, 4回目の練習では軽→重モルックで反復練習をして飛躍距離を伸ばすことができた。

3 事例生徒Cについて

(1) 実態と仮説

・授業中に顔が上がらず、取り組みが消極的なことが多い。

→興味を喚起させるような、生徒の好きな題材や

目標物にすることで顔を上げて取り組むことができるのではないか。

→関わりやすくなるようMTは生徒の目線やそれよりも低い高さで関わり、工夫することで参加しやすいのではないか。

(2) 方法～**体育教材の変更・開発**

当ててみたくなるスキットル、見やすいスキットルを用意しねらいを定めて投げることの楽しさを見いだせるよう考え、当たるときらきら光るスキットルと、生徒の好きなクリスマススキットルを用意した。

○補助スキットルⅡ、補助スキットルⅢ



(3) 経過と成果

生徒Cは、オリエンテーションでモルックの発祥の国がフィンランドであると聞いた際に、サンタクロースやムーミンの写ったモニターをみて、上体を起こし授業に参加することができた。

また、サンタクロースのステッカーを生徒のスキットルに貼ることで、目標物としてとらえ、腕が伸びたり、顔を上げたりして、意欲的に練習に取り組むようになった。

投球練習を繰り返すことで、自分の好きなサンタクロースが貼ってあるスキットルを選び、顔を上げて当たるよう反復練習した。当たれば称賛することで顔が上がることで定着しやる気を引き出すことができた。スキットルの位置を目の前から徐々に距離を離していき、1mくらいの距離でモルックを投げるできるようになった。

また、ゲームでは自分の番だけでなく勝敗を気にして周りの様子を見るようになり意欲的に取り組むことができた。



4 事例生徒Dについて

(1) 実態と仮説

・投げる的が上にある場合は、肘が上がり目標物に向け投げることでできるが、床にあるスキットルは見えづらく、姿勢が崩れ目標物の方向に投げるのが難しい。

→肘を固定することで、方向がぶれずに目標物に向けて投げることはできないか。

→見えやすいところから投げるなど反復練習を繰り返し、目標物に当たる確率が増え成功体験を積み重ねることができるのではないか。



(2) 方法～指導方法の工夫

肘の固定ではエアレックスマットを使用し、マットに肘が沈み込み滑りを防止して、簡易的な固定を行う。過度の固定はせず、腕の動きが定まらなく、肘が開いている際は、「肘を立てて」という言葉かけにより自分で意識して肘を立て固定するよう促す。

反復練習では、スキットルの見える位置4～5mくらいから始め、徐々に正規の範囲3mにして練習をする。

また、投げる際は肘を固定させ、手首、肩の位置をスキットルに対して正対させ、効率よく投げられるフォームで10～20回と反復練習する。正規のモルックとスキットル使用して、左右や遠近の方向に投げる練習を行う。

(3) 経過と成果

生徒Dは、初めの授業から正規のスキットルとモルックを活用し練習を行った。床に目標物があり、それに向けて投げる経験が無かったので、スキットルが見える位置からはじめた。見える位置が4～5mだったことから、練習を繰り返し徐々に距離を縮めて正規の3m程度で行うことができた。

「肘を立てて」の言葉を意識して、反復練習を繰り返した。次の時間には、フォームを忘れ、肘が開く、上体が崩れることがあり、目標のスキットルには当たらないことがあった。授業の始めにスタートポジションの意識付けとしてアドバイスやフォームの確認を行うことで、肘を立てて投げることで、目標のスキットルに当たり始めてきた。

最終ゲームでは、ねらうスキットルを1本決めて指差し、きれいなフォームで投げることで、1本を倒し、自信を持って取り組むことができた。

5 事例生徒Eについて

(1) 実態と仮説

・手を使ってボールを放したり、押したり、転がしたりすることができるが、投げる体験をしたことが少ない。

→スモールステップでモルックをつかむことからはじめ・放す・転がす・指先を使う・手首を使う、腕を動かすなど模範をしながら反復練習を重ねることで向上させることができるのではないか。

・目標物が床にあるので見えづらいのではないか
→座位姿勢の近いところから練習し立位姿勢にしていく。

(2) 方法～技能の向上

・スモールステップで体の使い方を確認しながら飛距離を伸ばし目標物にめがけて行う。

- ①手の甲を上にしてつかんだ物を放す
- ②手の甲を下にしてつかんだモルックを放す
- ③指先のひかかりを利用して放す
- ④指先の返し活用して投げる
- ⑤手首を使う
- ⑥腕を後ろから前へ動かす

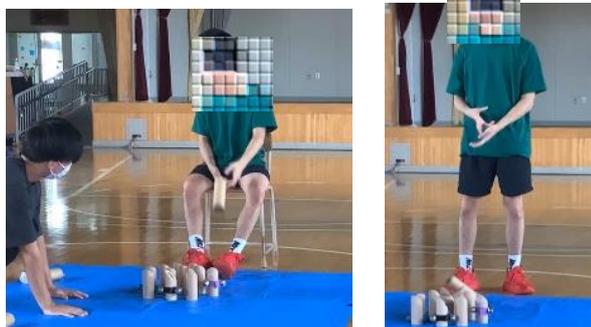
運動の種類を増やしていきながら距離を広げていき、動きが出て当たるようにする。また教師と交互に投げるやりとりをしながら反復練習を進めた。

・座位姿勢から立位姿勢へと反復練習をする。

(3) 経過と成果

投球練習では、びかびか光るスキットルを選び、座位姿勢から始め、教師が目標物を音で知らせ、見て場所を確認し、モルックを落した。スキットルに当たると音や色が変わり当たったことを目で確認したことで、活動への関心を持つようになった。生徒Eは手の平を上にしてアンダースローでモルックを投げる方法を理解することが難しかったため、モルックを縦持ちで投げるようにした。縦持ちの投げ方が徐々にできるようになり、2m程度投げることができた。練習を繰り返す中で、離れたスキットルに向けて手首を使って投げることができた。投げ始めまでに20秒～30秒かかっていたが、徐々に取りかかるまでの時間が短くなってきた。

最終ゲームでは、立位の姿勢で一番奥にある難易度の高い12番のスキットルを1本倒すことができた。



VI 課題

- ・投運動に向けて、体のばらつきが出る生徒に対し投げる範囲を固定するなど、身体の動きを固定して力が直接出るようにする教材教具を工夫すること。
- ・STによる個別最適な動きへの支援と協働的な活動の充実させること

VII まとめ

今回、アダプテッドスポーツの考えを基に個々の実態に応じて授業改善し工夫・修正してきた。

生徒一人一人の良さや可能性を最大限引き出すためにも、少し難しいけど練習したらできるかもしれないような目標を掲げたことが個別最適な学びへとつながったのではないかと考える。また、各スポーツの特色を生かした体験をすることで豊かなスポーツライフを楽しむことにもつながった。

このように、毎回授業の中で個人の投球練習を設け個別最適な学びの保障した時間の確保と、簡易ゲームやゲームなどの他者と関わる協働的な学びの時間の確保を一本化することで、ニュースポーツであるモルックの技術が向上するとともに、楽しさを味わうことができ、成長を実感することができた。スポーツの特色を生かした体験や積み重ねが、生徒たちの生涯にわたってスポーツライフを継続的に親しむ資質や能力を育てる一助になったと考える。今後も生徒たちが主体的にスポーツに取り組むためには、個別最適な学びへの支援と、協働的な学びの充実が必要であり、場所や道具の確保など学習環境の整備も必要と考える。

引用、参考文献等

- 1) 池畑 美恵子 (2021)
『感覚と運動の高次化理論から見た発達支援』
(学苑社)
- 2) 東根 明人 (2014)
『体育授業を変えるコーディネーション運動』(明治図書出版)
- 3) 樋口 和彦 (2021)
『重度重複障害児の学習とは』(ジアース)
- 4) 日本モルック協会
<https://molcky.jp/faq/>

スポーツを通じて技能向上と人間力の向上の関係性について ～運動未経験者を対象として行う研究～

北海道今金高等養護学校 教諭 中川千波
教諭 殿山祥子

I 研究テーマの設定理由

現在、スポーツ部に所属している生徒たちは、体を動かすことに興味・関心をもち、楽しく全力で取り組むことができている。

一方、活動中の生徒たちは、挨拶の声が小さかったり、先輩への言葉遣いがやや乱れていたりすることが時折見受けられる。本校の生徒指導部では、生徒の言葉遣いを重点指導事項としていることもあり、部活動においてもきめ細かい指導を継続して行っている。言葉遣いが乱れたときに、その場での教師の指導によって、すぐに言動を改めることができるが、しっかりとしたルールやマナーの定着を図ることが今後の課題であった。

以上のことから、様々なスポーツに取り組む中で、生徒一人一人が部活動をとおして生徒間、教師と生徒間での挨拶や言葉遣いなどを改善し、ルールやマナーの定着を図ることで、部活動以外の学校生活場面や家庭生活、さらには卒業後の生活において、より良い人間関係を築くことにもつながっていくと考えられるため、本テーマを設定した。

II 学校の実態

北海道今金高等養護学校は、開校して 27 年目を迎えた檜山管内唯一の特別支援学校である。全校生徒は 46 名で、スポーツ部には 14 名の生徒が在籍している。

本校と今金町は平成 23 年度から開始された今金町の就労支援事業に始まり、平成 28 年度には就労支援並びに自立支援に関する連携協定を結ぶなど、相互互惠的な関係が築き上げられている。また、町内の飲食店や多機能型事業所と連携した商品開発や学科生產品の受注販売、町民の全世帯による後援会加入など、様々な形で支援をいただいている。

本校では、スポーツ部、陸上部、音楽部、文化部、パソコン部が活動しているが、後援会からの援助によりユニフォームや大会参加に関わる費用を負担していただくなど多くの継続した支援のもとで活動している。

III 実践研究の内容・方法

サッカーは、11 人对 11 人で行う団体競技であるが、入学生の減少もあり紅白戦や様々な練習を行う上で支障が出てきている。また、中学校でサッカー部に所属し活動してきた生徒はほとんどおらず、集団競技としての特性やルール、基礎的な技術を身に付けることから毎年始まる。

経験の少ない生徒には、競技のルールを守るだけでなく、チーム内のメンバー同士が協力しなければ、競技が成立しないことを理解させる必要がある。

よって、サッカーの指導を行うことで、ルールを守る重要性だけではなく、思いやりをもつことや自分勝手な行動をしないなど、より良い人間関係を築くために必要な丁寧な言葉遣いや挨拶といったマナーを身に付けさせることにつながり、人間力の向上のための指導の一環になると考えられる。

そこで、今回の研究ではサッカーの指導を通じて、技能向上と人間力の向上の関係性について研究を行っていく。

(1) 普段の活動における指導

A 基本的な技能指導

スポーツ部に所属している生徒たちは本格的にサッカーに取り組んだ経験がないのが実態であるため、サッカーの指導をするにあたっては、まずは基本的な「ボールを蹴る」という技術の指導

を行った。指導方法としては、フットサルの巡回教室で学んだ3人1組で行うパス練習、正確にボールの中心を蹴られるようにシュート練習を中心に行ったが、単純なやり方だけではなく、興味・関心や集中力を高め、ボールを正確に味方に渡すために「サッカーゴルフ」を取り入れた。グラウンドにコーンを立てコーンの間を通すことや足を広げて立っている人の足の間を通すなど、様々なバリエーションを付け続けて取り組んだ。

「サッカーゴルフ」を用いた技術指導を行った理由は、スポーツ未経験者が初めてスポーツに取り組むにあたって、ゲーム感覚で技能の向上を図ることができると思われたからである。

目標を設けることで集中して取り組む姿が見られ自然とボールを蹴る力（強弱）や正確性が後のゲームで生かされることが見られるようになった。

具体的な技術指導の場面を紹介する。今回は先ほども取りあげた「サッカーゴルフ」について紹介する。

「サッカーゴルフ」のやり方は表のような課題をいくつか設定し、それを順番にクリアしていき、何周できたかを競い合わせた。課題設定時に重視したことは徐々に難易度が上がるようにしたことである。また、生徒の取り組んでいる様子を見て、柔軟に課題の難易度の上げ下げを行った。

〈課題の例〉

①	コーンの間を通す。(距離、間隔は様々)
②	コーンの間を通しコーンを倒す。
③	角度がない場所からゴールを決める。



サッカーゴルフの様子



パス練習の様子



指示を聞いて動く「鬼ごっこ」

B ゲーム形式の指導

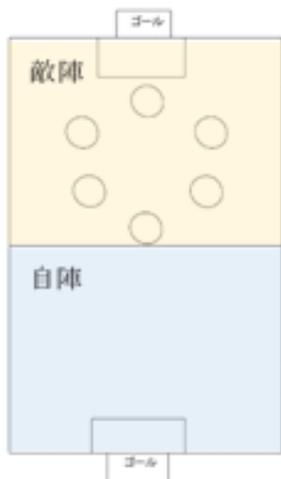
以上のような基本的な技能指導を行った後は、ゲーム形式の指導を行った。ちなみに、サッカーのルールについては、実際のゲーム中に体感してもらいながら覚えてもらった。

ゲーム形式の指導を行うにあたって重要視したことは生徒全員が協力し合って、ゲームに参加することであった。そのため、様々な特殊ルールを用いたゲームを行った。

具体的な特殊ルールを3つ紹介する。

一つ目のルールは、「味方全員が敵陣に入っていないとゴールを認めない」である。シュートが決まっても、味方が一人でも自陣にいた場合、ゴールとしては認められないというものである。具体的には図Ⅰのような場合はゴールが認められるが、図Ⅱのような場合はゴールが認められない。

〈図Ⅰ〉



〈図Ⅱ〉



このルールの狙いは2つある。第一に、全員で攻撃に参加する意識をもたせることである。これにより、全員が協力し合って点を取りに行く気持ちをもつことにつながる。

第二に、生徒同士が声を掛ける、周りの状況を見る場面を増やすことである。味方全員が敵陣に入ったかどうかを確認してからシュートを打たなければゴールが認められないからである。

二つ目のルールは、「ボールの数を途中で増やす」である。ゲームの途中でボールの数が一つから二つに増やすというものである。

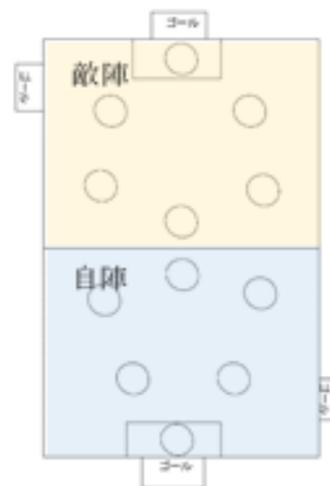
このルールの狙いも二つある。

第一に、ボールが二つに増えるため、相手を見てバランス良くポジションをとることである。

第二に、ボールを見ているだけで注目する所が増えるため、視野が広がることである。視野が広がることで声掛けの場面が増える可能性が高まる。

三つ目のルールは、「ゴールの数を増やす」である。ゴールの数をそれぞれ一つから二つに増やすというものである。具体的には図Ⅲのとおりである。

〈図Ⅲ〉



このルールの狙いは、「攻撃しようと思った方向がダメだったときに数的優位を作るために逆サイドに展開する」というもので、視野を広げることや周りからの声的重要だと意識付ける練習である。

以上のような特殊ルールも交えてゲーム形式の指導を行い、サッカー技術、ルール、言葉遣いや態度などのマナーの定着を図った。

C 小括

普段の活動における指導では、基本的な技術指導から始まり、ゲーム形式の指導までを行った。

指導の結果、サッカーゴルフをとおして様々な技術が向上し、それに伴って人間力の向上も見受けられた。蹴る・止めるという技能が向上するにつれて、ゲーム中に周りを見る余裕ができ、声掛けを行う様子が徐々に見られたり、積極的にゲームに参加できるようになったりと、協力し合う場面が増えた。

また、特殊ルールのゲームを通して臨機応変に対応する力が身に付いたと感じる。

以上のように、普段の活動における指導では、サッカーの指導を通し、技術の向上と人間力の向上の関係性がよく見られた。

(2) 大会出場における指導

A 事前指導

サッカー（スポーツ）経験がないということは、遠征の経験もないということになるため、はじめに、公共交通機関や宿泊先、試合会場での基本的なルールやマナーを確認した。加えて、大会参加中は集団行動となるため、集団行動の基本的なルールやマナーの確認も行った。

事前に以上のような事柄の確認を行うことで、大会出場に向けたモチベーション向上につながった。更に、練習し身に付けたことが通用するのか、何を頑張るのかを確認するために、個人目標を書かせた（事後に写真と目標を廊下掲示した）。



事前指導の様子

B 大会中の指導

大会中における試合以外の行動は、キャプテンや3年生を中心に、基本的には生徒の自主性に任せていた。なぜなら、逐一教師からの指導や助言をしてしまうと、自分で考えて行動しなくなり、社会に出たときに困ってしまうからである。ただし、あまりにもルールやマナーを逸脱する行為や次の動きが分からず困っている様子が見受けられた場合は、指導や助言を行った。

試合中はキャプテンや3年生を中心に練習してきたことがどの程度実行できるのか見守っていたが、サッカーの試合未経験者がほとんどであり、ミスに対するマイナスの声ではなく、次につながる声を掛けることの重要性を大会を通じて学ぶことができた。



試合中の指導の様子



試合中の様子

C 事後指導

大会を通じ生徒はサッカーの難しさ、1勝することの難しさを感じることができた。その反面、集団スポーツ、1点を取る楽しさも感じることもできた。まとめとして、目標用紙に感じたことを記入し大会記録として保護者にも見てもらえるように廊下掲示した。

以上のような事後指導をとおして、生徒自身が自らの大会中の行動を振り返ることができ、大会出場の経験が今後の学校生活や部活動等に生かせるようにした。

その後の部活動では、この遠征で明らかになった反省点を改善すべく、次年度の大会がより向上するように指導した。



事後指導のまとめ

D 小括

大会出場における指導では、大会中の指導だけではなく、事前指導と事後指導を行った。

指導の結果、普段の活動における指導の成果がおおむね発揮され、実りのある大会出場となった。特に、秩序を乱さず行動できたことや指示を聞きながらチーム全員で協力し合って試合に臨めたことは、今後の学校生活や部活動のみならず、社会に出たときに生かすことができる経験であったといえる。

一方で、昨年全国的に見られた気象状況の影響で炎天下の中で2試合を行うなど、体験したことのない本州の暑さで体調を崩してしまう生徒が見られ、課題といえる。

以上のように、大会出場における指導では、普段とは違う環境の中で特に（気象状況も含めた中で）多くの学びと貴重な経験をするなど成果が見られた。

IV まとめ

今回の研究ではサッカーの指導をとおして、技術の向上と人間力の向上の関係性について研究を行った。

結果、以下のような成果が3つあった。

一つ目は、基本的な技術指導による、技能の向上である。特に、サッカーゴルフによる技能の向上で、スポーツ未経験者であっても、ゲーム感覚で楽しみながら目標をもつことで、ボールを蹴る技術を成長させることができた。

二つ目は、技能の向上に伴う人間力の向上である。サッカーゴルフ等でサッカー技能が向上したことにより、ゲーム形式の練習では、周りを見る余裕ができ声掛けを行う様子が徐々に見られたり、積極的にゲームに参加するようになったりするなど、生徒同士が協力し合う場面が増えた。

このことから、基本的な技能が向上することで周りを見る余裕、コミュニケーションなどの人間力も向上していくことにつながると感じた。

三つ目は、状況が常に変化するサッカーでは臨機応変に判断し行動する力が求められるが、学校生活や社会生活においても、状況を考え判断し行動するなど同様につながっていると感じることができた。

一方で次のような課題が見られた。

一つ目は、遠征先では普段と違う環境の中で、状況を判断し行動することや発言することが不十分であった。そのような経験の積み重ねが少ない生徒にとっては、相談し考え、行動するという普段の生活では味わうことができない貴重な場面があった。

また、試合中においても、練習では起こらなかった状況になると、周りを見る余裕がなくなり、生徒同士の声掛けが荒くなったり、少なくなったりするなど、生徒同士で協力し合うことが困難になる場面があった。

このことから、普段とは違う環境下でも、普段取り組んできたことを十分に発揮するためには、

臨機応変に対応できる力を身に付けることが重要であるとする。

二つ目は、大会に向けた練習や大会で経験し学んだルールやマナーなど、普段の生活の中に落とし込むように、生徒も指導者も意識することができるようになると、今後の大会や日常生活に生き、より成長した人間形成の一助になると感じた。



V 今後の展望

ここ数年、本校に入学してくる生徒が減少傾向にあることや義務教育期間にスポーツに触れる生徒も少なくなっている状況が見られる。

スポーツ部の担当として、3年間という限られた期間の中で、より良い人間関係や体力の向上、遠征先やスポーツをする上でのルールやマナーを身に付けさせることや様々な経験をさせることが部活動を通じ必要だと考える。

また、生涯にわたりスポーツに親しみ関わることで、より良い人間関係や人間形成につながると考える。本校は、卒業後、人口が少ない過疎地域を就労先や生活の場にする生徒も少なくないことから、卒業後にもスポーツに携わる生徒を少しでも増やすことが必要だと考える。

地域や学校、様々なスポーツ協会などの支援が行き届く社会になることを望む。

引用、参考文献等

公益財団法人日本サッカー協会 HP

病弱児童生徒のスポーツ活動の取り組みについて ～ボッチャ（オンラインボッチャ）を通じた主体性の向上～

北海道手稲養護学校三角山分校 教諭 梅野 綾人

I 北海道手稲養護学校三角山分校の概要

北海道手稲養護学校三角山分校（以下：本分校）は、「独立行政法人国立病院機構 北海道医療センター西館」に入院する神経筋疾患や重症心身障害などの児童生徒を対象にした学校である。令和2年8月、併設する国立病院機構北海道八雲病院の機能移転にもなっており、札幌に移転し、「北海道手稲養護学校三角山分校」としてスタートした。札幌でも校舎は北海道医療センターに隣接しており、特別教室などの学校施設・設備を市立札幌山の手支援学校と共有している。

現在小中学部の在校生はおらず、令和5年度1月現在は、高等部10名の生徒が在籍しており、その多くが筋ジストロフィーである。筋ジストロフィーは進行性の疾患のため、病気の進行に伴って転学及び進学をしていく場合が多い。この疾患は、今までできていたことができなくなってしまう喪失体験と社会経験の不足により自己肯定感が育ちにくいと言われている。また、家族と離れての入院生活に抵抗や不安を感じる生徒も多いため、生徒一人一人の心に寄り添った指導や主体的に「できること」を増やし自己肯定感を高める指導が大切となっている。



（写真1：北海道手稲養護学校三角山分校の校舎）

本分校の教育課程は、児童生徒の障がいの程度や実態に応じて3つの類型を設定している。

表1：本分校の教育課程

普通学級	重複障害学級	
A類型	B類型	C類型
準ずる教育を主とした教育課程	知的障害教育を主とした教育課程	自立活動を主とした教育課程

今年度は感染症等の対策が緩和し、隣接している病院の主治医と内容や方法を確認した上で、保護者の来校や外部との交流学习が可能となっている。昨年度に引き続き、ICTの活用は本分校の指導の充実や生徒が主体的に学ぶためのより有効な取組となっている。テレプレゼンスロボットを使用した体験的な学習や間接的な学習など、学びの場や方法を充実させるための非常に大切な役割を担っている。

II 生徒の実態と体育の状況

本分校の生徒は、運動機能の低下により、前籍校では体育の授業に主体的に参加した経験に乏しく、スポーツへの喪失感を抱いてきた生徒も多い。しかし、本分校に転学及び進学し、自分に合った教材・教具を使うことで、スポーツを主体的に「できる」「楽しむ」ことが可能になり、体育の授業を楽しみにしている生徒が多い。

本分校の体育の授業は、高等部のA類型、B類型の生徒が合同で学習を進めている。実態に応じてルールの変更や学習方法を模索しながら進めているが、在籍数の減少に伴い団体競技の実施が難しくなったり、チームや対戦相手が限られた中で戦術の幅が狭くなったりする様子も見られる。

III 研究の目的

昨年度から競技としてボッチャに取り組んでいる。ボッチャはパラリンピックの正式種目であり、障がいの程度により4つのクラスから競技が行われており、本分校の生徒もオリンピック選手を目標にすることができる種目である。

コロナ禍以降、校外学習や交流学习などの実施が厳しく、本校の児童生徒の外交的な活動が減ってきていた中、令和3年度から本分校の教育に御支援をいただいている東京の日本橋にある株式会社オリィ研究所からの情報提供を受け、オンラインボッチャ協会協力のもと、オンラインボッチャ全国大会に参加することとした。全国大会参加にあたり体育科の授業においてボッチャを実施し、基礎的なボッチャのルールを理解することから始めた。



(写真2：第2回バイोजェンカップオンラインボッチャ全国大会パンフレット)

本研究は、校外の大会に参加することを目指した授業を通して、児童生徒がボッチャ競技への主体的な参加の意欲と、様々な人との交流を目的とした。

IV 研究の内容・方法

1 対象

高等部 A類型 3名 B類型 5名

2 実施期間

令和5年6月～8月 13時間
(代表選手別途4時間)

3 内容

表2：単元「ボッチャ」

単元名	時数
○ボッチャについて ・歴史や由来について ・競技の内容	1
○基礎練習 ・基本動作の練習 (ランプ、アシストの使用) ・三角山ルールの確認	1
○ユニフォーム作り ・全国大会参加に向けたユニフォームのデザイン、オリジナルロゴの作成	1
○ゲーム【個人戦】 ・校内予選 (オンラインボッチャ大会参加資格をかけたリーグ戦の実施)	8
○ゲーム【団体戦】 ・代表選手 対 在校選手	2
○オンラインボッチャ大会への参加 (校内予選上位3名。2日間実施)	4

4 方法

本分校で行っている様々な競技は、生徒の実態に応じてルールを変更したり、生徒に応じた教材を作成したりして学習を進めている。

単元の1時間目は、昨年度のボッチャの取り組みの振り返り、パラリンピック競技について、ルールの確認について実施した。また、オンラインボッチャ全国大会に参加をするため、校内でリーグ戦を行い、上位3名が学校を代表し大会へ出場することを生徒に伝えた。

表3：ルールの確認（個人戦）

	正式なルール	三角山ルール
競技内容	・コイントスで先攻後攻 ・1人6球 ・4エンド勝負	・コイントスで先攻後攻 ・1人6球 ・2エンド勝負
コート	・15m×6m	・バドミントンコート
補助	・アシスタントはBC1、BC3クラスで使用可。	・ランプ、アシスタント必須 ・状況に応じてリリーサーも使用

2時間目以降は、基本動作を行った後に個人戦、団体戦の試合を行った。本分校の生徒は、病気の進行に伴い車椅子の座り方の微調整や、学習用具の準備など日常的なことも他者の介助を必要とするため、相手に具体的に伝えるコミュニケーション力が重要になる。

ボッチャの授業においても、今年度は全国大会を想定して全員ランプ、アシスタントの使用を必須とし、ランプの高さや角度、ボールを置く位置を具体的にアシスタントに伝えることができるよう重点的に指導を行った。また、団体戦ではチームごとに分かれて投球順や作戦を話し合い、試合の途中でもランプの向きやボールの高さについてチームで相談する機会を設けた。

V 指導の実際

1 教材教具について

ランプを使用した際に、ボールを手で押し出せる生徒と、押し出すのが難しい生徒がいる。そのため生徒の実態に応じた持ち手の太さや、長さ、押し出しやすいように先端に木材を取り付けたリリーサーを用意している。ボールの高さやランプの角度に応じて生徒自身がリリーサーの種類や、試合状況に応じて使用の有無を判断しながら行っている。



(写真3：リリーサー)



(写真4：リリーサーを使用している様子)



(写真5：手でボールを押し出す様子)

2 足元が見えない生徒への教具の工夫

写真7の生徒は、常時人工呼吸器を使用し、身体への負担を減らし、良い姿勢で活動ができるようにするため、車椅子をリクライニングした状態で学習や活動をしている。そのため、視界がほぼ天井となりコート全体の様子や、ランプの向き、ボールの行方を見るのが難しい。iPadと生徒用のモニターとの画面を共有し、ランプ全体、ボールの行方を映すことで、見えにくさを改善している。



(写真 6 : モニター画面を見ながらアシスタントにランプの調整を伝える様子)

3 個人戦・団体戦について

個人戦では最初、アシスタントにランプの向きやボールの高さの調整を「もうちょっと右」という伝え方を生徒が多くいたが、回数を重ねるごとに「白いテープよりボール1個分右」「この位置では細いリリーサーを使います。」など具体的に自分がどうしたいのかを伝える場面が増えてきた。

対戦表を見ながら、「次は勝つ!」「あと〇点取れば順位が変わるかも…」「〇〇君強いなあ」と、自分の結果だけでなく他者の結果にも興味をもったり、気持ちを表出したりする様子が見られるようになった。上位3名が決定した時には、3名を讃える様子に加えて、来年の大会参加への意欲を表す生徒も見られた。

団体戦では、3人1チームで行い、1投1投どの位置を狙ってどういう戦況にしたいのかを考えて相談する場面も見られた。



(写真 7 : チームでランプの位置について意見を出している様子)

(写真 8 : 対戦表)

4 ユニフォームの作成

団体戦競技等で使用するピブスについて、筋疾患をもち呼吸器をつけている生徒には着用が難しい部分があるため、羽織るタイプのベースボールシャツタイプを小野寺パラスポーツ振興会の助成金で作成させていただいた。色、文字のフォント、エンブレム等、生徒全員がアイデアを出してアンケートで取り決めたことで、仲間意識が高まり、全国大会参加への意欲付けにもつなげられた。また、体育の授業だけではなく、学校行事や他の大会へ参加する際に大いに活用することができ、生徒一人一人の所属意識も高まった。



(写真 9 : 三角山ユニフォーム)

5 オンラインボッチャ全国大会

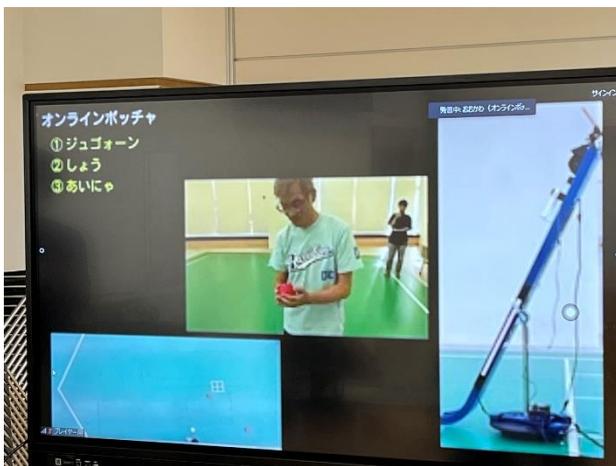
校内での個人戦を経て、上位3名が「チーム三角山」として大会へ出場した。競技では、会場に設置されたオンラインボッチャ専用ランプをzoom経由で遠隔操作する。TV画面に映し出されたコートの様子を参考に、ジャックボールに近づけられるよう手元のiPad画面にて、ランプの向き、ボールの高さを調整することができる。



(写真 10 : TV画面を見ながらランプを調整)



(写真 13 : チームで次の1投について相談)



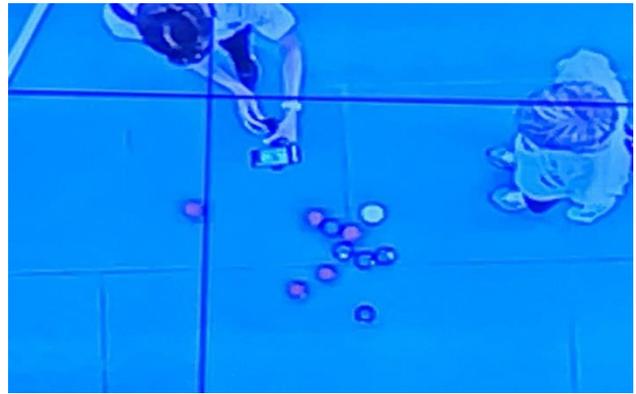
(写真 11 : モニター画面)

参加資格が18歳以下のスポーツをする上で困難がある人であるため、全国様々なエリアの選手と戦うこととなった。



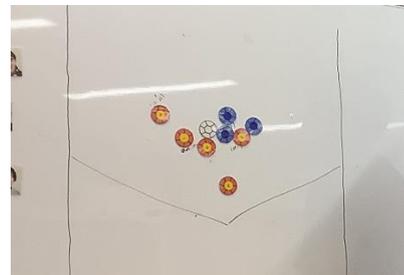
(写真 12 : 予選リーグに参加している様子)

予選ブロックでは2試合、チームで6球の投球、1エンド勝負で行われるため1投1投、「もう少し右だったか」「さっきこの高さでちょうど良かったから、もう少し上の方が勢い出るかも」「○番のボールをはじいて、こっちのボールをジャックボールに近づけられないか？」など積極的に仲間と会話をしながら取り組む様子が見られた。



(写真 14 : 上からコートを映した様子)

決勝リーグでは予選リーグの経験を活かしてランプやボールの高さの調節を行っていた。また、その日のコートの状態でもボールの転がり方が違うことに着目するなど視野が広がる様子も見られた。ホワイトボードには作戦盤を作り、戦い方の幅も広げることができ、全国3位の成績を残すことができた。



(写真 15 : ホワイトボード作戦盤)

対戦相手とは、画面越しで初めて会う人たちばかりだったが、互いに顔を見て、「卒業前のいい思い出になった。」「楽しかった。またやりたい。」「悔しかったけど楽しかった。リベンジしたい。」と感想を伝え合い、交流を図ることができた。また、対戦相手だけではなく、大会を運営した。

ていただいたスタッフの方たちとも、声が聞こえているかどうかの問い掛けなどにも積極的に応答する様子も見られた。



(写真 16 : 感想を述べている生徒たち)

VI 成果と課題

今年度は校外のスポーツ大会へ参加することを通して、児童生徒がボッチャ競技への主体的な参加の意欲と、様々な人との交流を目的に研究を進めた。

本分校の生徒は、「自分なんか…」「どうせやってもできない」と、スポーツに対して消極的な姿勢が見られていたが、今年度はボッチャの競技を通して、教材道具の工夫や ICT の活用、校外の大会へ参加することで「自分もできる」「次こそは」「勝ちたい」「悔しい」と気持ちを表出し競技への主体的に取り組む場が増え、自信をもって学習に取り組む生徒が増えた。また、校外の大会へ参加する場を設定することで、「やってみよう」という社会参加への前向きな姿勢を見出すことができたと考える。

課題としては、少人数のため団体競技ならではの楽しみが体験し難くなっている。また、病気の特性上、体力面でも体験できる競技に限られる場面が多いため、今後も校内だけではなく生徒自身が視野を広げて活動できるような取り組みを増やしていきたいと考える。

公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会の御支援により教育活動が大変充実させていただき感謝申し上げます。今後も振興会のご支援のもと、病弱教育特別支援学校として様々な取組を考案・発信し、病弱教育の充実を図っていきたい。

ICT 及び視覚支援を用いた部活動指導の工夫と実践 ～バスケットボール部の指導実践～

北海道紋別高等養護学校 教諭 岸 下 彩 乃

I はじめに

1 本校の実態

紋別市に構える、北海道紋別高等養護学校は開校し 27 年が経ちます。『明日の社会に貢献し 心豊かにたくましく そして しなやかに生きる人間を育成する』を教育目標とし、「夢や目標の実現に向けて、生徒が生き生きと学ぶ学校」を目指し、教員・保護者そして地域と連携し、日々、生徒達に寄り添った支援を行っています。

II 研究テーマの設定理由

本校の部活動は余暇活動の一環として行っています。生徒数は 65 名で部活動には 57 名が加入している状況です。

バスケットボール部は生徒 6 名(男子 4 名・女子 2 名)で活動しています。大会時には、本校生徒や卒業生を助っ人をお願いして、大会に参加しています。近年は北海道 F I D バスケットボール研修大会・予選会において良い結果や予選会を勝ち抜けるようになってきました。

日々の活動については、週 4 日で行い、2 日間は体育館、残りの 2 日間は、夏は近くの公園で練習し、冬は廊下練習がほとんどです。体育館練習の日は、ゲーム形式での練習に重点を置き、顧問以外の教員の力も借りながら実践的に行い、廊下練習では体育館での練習を振り返りながら、基礎基本や体力づくり、また力を付けたい部分に重点を置いて練習に取り組んでいます。

指導を行う中で、初心者がいたり、言葉では動きのイメージがしにくかったり、自分の動きが合っているのか分からなく不安になったりなど、様々な気持ちをもっている生徒が少しでも楽しくバスケットボールをできるように支援をしています。そして、バスケット

ボールのプレイする幅を広げられるようにならないかと考え、基礎・基本の姿勢を身に付けるための指導の工夫として ICT を取り入れた指導を加えることで、本校生徒の実態に沿ったバスケットボール指導の充実を図るため研究テーマを設定しました。

III この研究を通して

バスケットボールは休み時間に体育館で、友達と公園などで行える身近なスポーツだと感じています。など、「バスケしたんですよ」そんな声を聞くと、誰でも手軽にできて、遊びに取り入れられるスポーツだということを感じるようになりました。このことから、顧問としてバスケットボールに携わるのであれば、現在の部活動としての「上手になりたい」「試合に勝ちたい」はもちろんのこと、卒業後の余暇活動としてバスケットボールを行う機会があったときに、仲間と楽しくバスケットボールをしてほしいと考えています。本校の取組をご覧になり、何かの参考になれば幸いです。

IV 実践研究の内容・方法

1 指導の内容

バスケットボールに必要な、シュート、パス、オフェンス、ディフェンスの基礎的な動きから実践的な動きまでをアプリ「見比べレッスン」を活用し、インプット・アウトプットにつなげています。正しい動きと見比べることで、課題を明確にし、実践的なプレイにつなげられるように取り組んでいます。また、チームプレイとして、1 人の動きを自分自身だけの課題として捉えるのではなく、チーム全体で見比べ意見を伝えあうことで、チーム力向上や対話を増やすことも考えて実践しています。今回は見比べレッスンを活用し

ていない場面も含めた、本校の実践の取組を指導の記録として示させていただきます。

2 活用アプリ

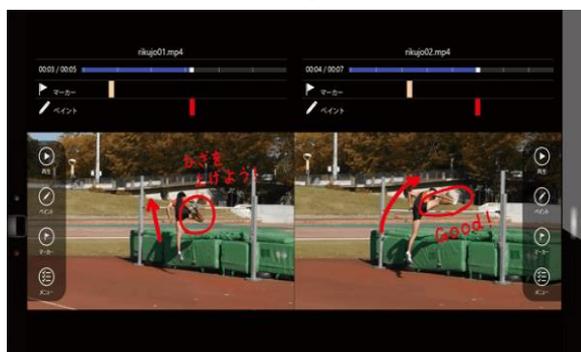
アプリ「見比べレッスン」について

このアプリは、令和4年度にICTの取組として学校のiPad計7台に導入しました。有料のため730円となりますが、とても見やすく分かりやすいアプリだと感じています。



(図1 見比べレッスンアプリについて)

ペイントという機能を活用し文字の書き込みや、2つの動画の同じ動きを比較したいときにマーカーという機能でチェックを入れることで何度も同じ位置に動画を合わせることなく再生することができます。



(図2 見比べレッスンアプリについて)

V 指導の記録

1 準備体操

準備体操は、動的ストレッチ（通称：ダイナミックストレッチ）を行っています。以前は体育で行っているストレッチを全員で行っていましたが、限られた時間の中でシュート練習などの個人練習を行えるように、準備ができれば、各自ストレッチを行うという方法を取り入れました。体を動かして筋肉を刺激しながら関節の可動域を広げて柔軟性を高め

るストレッチを行っているので、ある程度、体が温まった状態で活動に入ることができています。



(図3 準備体操の様子)

2 ゴール下のシュート練習

シュートを打つ感覚づくりのためにゴール下のシュート練習を行っています。ペアを作り、ゴール下3カ所を1分間ずつ行います。同じリズムで打つことや相手からパスをもらって打つ感覚をつけるために、1分間打ち続ける練習です。スリーポイントを含めた外から打つシュートが格好良いと生徒も口にするがありますが、体育館練習では必ず行っているため、ゲーム形式などの実践では、ゴール下シュートの確率が上がるようになりま



(図4 ゴール下シュート練習の様子)

3 トリプル・スレットの意識

今年度、特に重点的に取り組んでいるトリプル・スレットです。本校では、生徒が名前を覚えやすいようにバスケットポジションと呼んでいます。シュート、パス、ドリブル、ドライブインをスムーズに行えるように、あらゆる場面でバスケットポジションからスタートするという形を図り、意識付けを行っています。

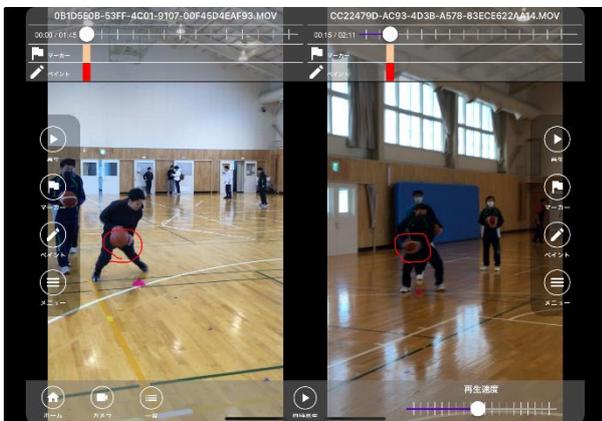


(図5 バスケットポジションの様子)

4 ドリブルシュート

スリーポイントラインからバスケットポジションの姿勢でスタートし、計6種類のドリブルシュートを行っています(ノーマルシュート、ワンステップシュート、ステップインシュート、バックシュート、ジャンプシュート、フレアカット)。

図6のように、アプリを活用し、姿勢や正しいボールの位置であるかなど、気になるポイントがあれば個別に指導を行っています。



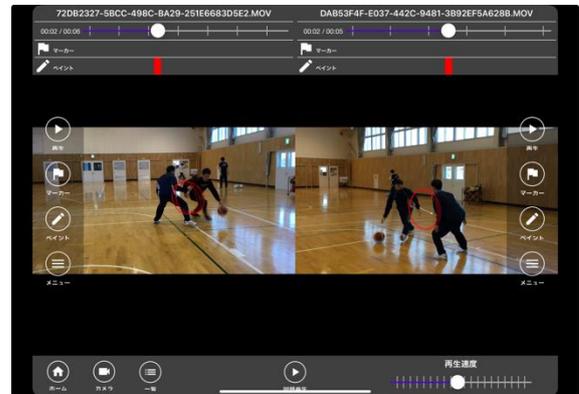
(図6 スタート時のバスケットポジションの様子※実際は動画)

5 1対1

1対1は、エルボ(長方形の角:ハイポストの位置)にオフェンスが立ち、ディフェンスはその延長線上のゴール下で待ちます。第3者がゴール下からオフェンスに向かってボールを転がし、そのタイミングでディフェンスはオフェンスに向かって走っていきます。オフェンスがボールを受け取ったらゴールに攻めるという練習です。

1対1のポイントとして、オフェンスはデ

ィフェンスの動き、特に「距離」を意識して行うように伝えています。図7のようにディフェンスとの距離がある場合を示し、どのような攻め方(ボールを受け取ったらすぐに打つなど)ができるのが、考える場面を作りました。



(図7 1対1のディフェンスとの距離についての場面 ※実際は動画)

6 ポジション別 シュート練習

複数の教員で個別に指導を行っています。特にポジション別のシュート練習を重点的に行い、ゲーム形式での練習に活かせるように、ポジションの意識付けを行いながら取り組んでいます。



(図8 センター ゴール下の練習の様子)



(図9 フォワード ミドルシュートの練習の様子)

7 個別練習

同じ練習が難しい場合は、個別で練習を行います。できることから取り組み、段階を踏みながら行っています。「できた」を増やしていけるように、必ず顧問が付き添い、一緒に練習をするように取り組んでいます。



(図 10 ドリブル練習の様子)

8 ゲーム

体育館が半面の日には3対3、全面の日には4対4もしくは5対5を行っています。

自分で攻めること、シュートを打つことをポイントとして行っています。個別の練習や重点的な練習を多く行っていることから、「自分で」という意識がかなり定着し、攻めていくという心意気をもったり、プレイで表現したりすることもできるようになりました。また、対戦相手が教員であることから、「どうしたら勝てるのか」という課題意識をもって取り組む姿勢が見られ、仲間同士で話し合ったり、ゲーム中にお互いに声を掛け合ったり、時に指示したりする場面も増えました。そして、フィジカルも強くなったように感じています。



(図 11 ゲーム形式での練習の様子)

限られた時間の中で、実践形式での練習を多くできるように、練習に参加できる教員にお願いをしてゲームを行っています。

9 廊下・格技場での練習

廊下や格技場での練習では、体育館練習のときの課題を重点的に行っています。

ディフェンスの確認。足の動かし方や幅を確認した動きの練習を行っています。動きが合っているか見比べ、確認を行いました。



(図 12 格技場での練習の様子①)

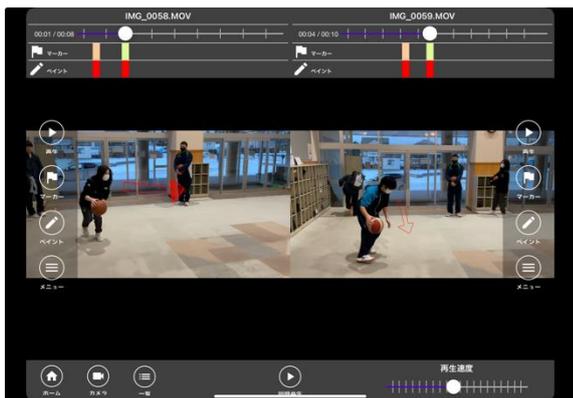
オフェンス・ディフェンスの確認。三角形になるようにマーカーを置き、頂点からドリブルをし、ディフェンスに前に入られたら下がる、頂点に戻ったら、切り返して逆に進むという練習です。ディフェンスは、しっかりオフェンスについて行くことをポイントにしています。

ディフェンスに取られないドリブルの位置やディフェンスの姿勢を保っているか、着いていけているかを見比べ確認を行いました。



(図 13 格技場での練習の様子②)

ドリブルの確認。ボールをチェンジする時の視線やボールを通す位置など、見比べながら細かい部分まで確認しています。



(図 13 廊下練習の様子)

10 北海道 FID バasketボール研修大会・予選会の様子

大会は、日々の練習の成果を発揮する場でもあります。普段、経験することのない他校との試合を経験することができます。生徒は緊張感や不安、頑張りたいという意欲など、様々な気持ちをもって試合に臨みました。3試合を仲間と必死に、そして楽しくプレイすることができました。2勝1敗という結果を収めることができました。他校の試合を見ながら「あの動きが凄い」「やってみよう」など、今後の目標を見付ける場ともなりました。



(図 14 大会時の様子)



(図 15 大会時の様子)



(図 16 大会時の様子)

VI 実践研究と成果と今後の課題

1 実践研究の成果

生徒がバスケットボールを「行う」だけでなく、自分の変化を「見る」「知る」ときに「考える」ということや、仲間とのコミュニケーションの一つとしてバスケットボールについて話すということ、ICTを通して行えないかと考えて、指導を行いました。

「見る」「知る」という面では、正しい動きと自分の動きを見比べたときの「合っている」「違う」という部分への気づきの反応は一目瞭然でした。

どのように動けば良いのか、次はこうしようなど自分で見て考えるという力が付くことが分かりました。

仲間とのコミュニケーションという面では、初めは意見を述べて良いのかという雰囲気がありましたが、良かった部分を取り上げることで、「自分はこうだった」や「もう少しこうしてみると良い」など、少しずつ会話を展開をもてるようになっていくことが分かりました。それにより実践的に動きの確認をしているときも、意見を述べ合う場面が増えたことが分かりました。

2 実践研究のまとめと今後の課題

前段の部活動の実態でもお伝えしましたが、本校のバスケットボール部は週4日の約40～50分で練習を行っています。生徒が一つでも多くバスケットボールを学部とともに、

楽しんだりしてくれたらという希望をもちながら、日々、指導にあたっています。

今回、ICTを用いての指導を行いました。しかし、生徒の「気づき」や「見る」「知る」にはとても有効的であり、生徒の自信やコミュニケーションにつながりましたが、その反面、短い時間でのICTを活用した指導は課題が残りました。

今後は、複数の教員が個別に指導を行う場でICTを活用するなど、環境を整えることやどれか一つの練習にICTを導入するなど、ICTを使用する場面の選定が必要であると考えています。

生徒は、バスケットボールについて「難しいな」「分からないこともあるな」と口にしながらも、楽しく部活動に参加しています。

今後も、生徒が日々の練習の中で経験していることを実践に活かせる環境を整えることや、バスケットボールが楽しいと感じられる場面を作れるように指導を行い、卒業後も余暇の一環として続けていけるスポーツになってほしいと考えています。

Ⅶ おわりに

「分かりやすい指導としてどのようなものが良いのか」「短い時間の中でどのようなことができるのか」「生徒の特性に合わせた指導ができているのか」など、日々、考えることがあります。結果的には、生徒と一緒に楽しみ、学び合うことが大切であるという結論に落ち着きます。

今回、実践報告の機会をいただき、iPadの画面を見返すことがいつも以上にありました。画面越しに映った生徒の表情を見てみると、「一生懸命頑張っているな」と、しみじみ感じることも多々ありました。部活動を通して、仲間と一緒に頑張ってきたこと、できなくて悔しかったこと、シュートが入って嬉しかったこと、試合で勝って勝利を分かち合ったことなど、卒業後、困難なことに直面したときに、「あの時、頑張れたな」「もう少し頑張ってみよう」という気持ちを思い出してくれたらな・・・という思いを込めながら、

今後も生徒に全力を注いでいきます。

【引用・参考文献等】

- 1) 大修館書店 見比べレッスン (アプリ)
- 2) 日本FIDバスケットボール日本代表 練習内容
- 3) YouTube DJ サックマン [NBA スキルコーチ]

【協力】

本校バスケットボール部 顧問 平賀 雄一
大原 花凜



表紙デザイン 「手と手をつないで」北海道手稲養護学校三角山分校
高等部3年 青木健、熊谷空（合作）

裏表紙デザイン 「応援団」北海道手稲養護学校三角山分校
高等部3年 高橋雄希

発行日 令和6年3月
発行 公益財団法人明日佳
理事長 小野寺 眞 悟
印刷 北海道小樽高等支援学校